

台湾における日本語学習者の日本語の音韻

—その実態と問題点—

伊藤祥子

1 はじめに

近年、日本語学習者の増加が激しく、海外の中でも、特に中国、台湾、韓国等の東アジア地域の近隣諸国では、日本語学習者が急増しており、日本語学習の目的も多様化してきている。

そこで、アジア地域での日本語学習者（大学生）の日本語の実態を明らかにし、どのように母語の影響を受けているか、またどのような点に障害があるかなどを解明し、日本語教育の方法改善をはかることは緊急を要すると考え、その手始めとして、まずアジア地域の中で台湾を選び調査を実施した。また、韓国でも同様な調査を行なっている。調査は大きく音韻とアクセントに分かれているが、今回は台湾の調査より、音韻の「聞き取る調査(1)~(3)」に的をしぼり、調査結果を考察する。

なお、本稿では人名に関する敬称はすべて省略した。

2 調査の概要

2.1 予備調査

本調査に先立ち、予備調査を1987年9月に台湾輔仁大学外国語文学院日本語文学系¹⁾で実施した。インフォーマントは2年生。調査項目は大きく、文法と音韻に分かれる。調査はアンケート方式で、音韻については調査時間等の制約もあり、テープによる聴き取りが中心であった。

2.2 本調査の実施とインフォーマント

本調査は1989年9月、輔仁大学外国語文学院日本語文学系の2・3年生を対象に実施した。本研究で資料として用いたインフォーマントは、台湾語²⁾を母語とする者、2年生50人・3年生30人の計80人である。なお、台湾では、小学校に入学した時点で共通語である北京語を学習し始めるという。

予備調査はテープによる聴き取りが中心であったが、本調査ではL1教室を使用することができたので、アンケート方式による「聴き取る調査」に加え「読ませる調査」も行なった。アンケートはすべて日本語で作成したが、調査に際しては必要に応じて、邱明麗³⁾が適宜中

1) 台湾台北市郊外にある私立大学。

2) ここでいう「台湾語」とは、いわゆる「閩南語」を指す。

3) 調査当時、信州大学人文学部研究生。現在、信州大学大学院人文科学研究科在学中。

第1表

3 年次生		2 年次生	
第1学年		第1学年	
初級日語	4 単位	初級日語	4 単位
日語会話	4 単位	日語会話	6 単位※
日文習作	2 単位	日文習作	2 単位
日語読本	2 単位	日語読本	2 単位
日語実習	1 単位	日語実習	1 単位
第2学年		※うち4単位必修, 2単位選択	
中級日語	3 単位		
日語語法	2 単位		
日文習作	2 単位		
翻訳	2 単位		
日本地理	2 単位		

国語で補った。

台湾は9月に新学期が始まるので、インフォーマントは調査時点では新しく2年生、3年生になったばかりであった。したがって、輔仁大学での日本語学習時間数は2年生約450時間、3年生約850時間である。表1に、2・3年生が受講してきた日本語関係のカリキュラムと単位数を示す。なお、大学入学以前の日本語学習歴については、二カ月未満が2年生1名・3年生2名と、1年間が2年生に3名いたが、他は全員学習歴は皆無であった。また、性別については、輔仁大学日本語文学系はもともと男子学生が少なく、インフォーマントの中では2年生は50人中男性は6名、3年生は30人中男性は5名であった。このように男性が極端に少ないため、「性別」の要因は今回特に抽出しなかった。

3 調査内容及び調査結果

3.1 聴き取る調査(1)

この質問は、あらかじめ四つの短文の選択肢が示されており、テープの中で読んでいるものを一つだけ選ぶというものである。調査結果を表2に示す。*の印が付いているものがテープの中で発音されているものである。

まず、調査結果を見ていくと、①では2・3年生ともに90%近くの者が正確に聴き取っている。ただし、若干の者が「d ことものです」を回答している。ここには、日本語のタ行子音とダ行子音の混同があり、これは他の調査項目でも顕著に認められるので、一括して4.1で詳しく述べることにする。

②④⑤⑥では、どの質問も90%以上の人が正確に聴き取っているが、注目されるのが③の場合である。テープの中で読んでいるのは、「b また だいています」であるが、半数近くの人が、「c まだ だいています」と聴き取っている。これらの人は、「また」の「た」を「だ」と聴き取っており、ここにも日本語のタ行子音とダ行子音の混同が見られる(→4.1)。

また、③にはアクセントの習得の問題も絡んでいると思われる。「b また だいていま

第2表

*はテープの中で発音されているもの (%)

①		2年	3年	④		2年	3年
a	ころものです	0	0	a	きていってください*	91.9	100
b	このものです	4.1	0	b	きていってください	2.0	0
c	こどものです *	89.8	86.7	c	きていてください	6.1	0
d	こどものです	6.1	13.3	d	きていてください	0	0
②				⑤			
a	ふっています *	100	100	a	おおばさんです	0	0
b	ふいています	0	0	b	おばさんです	0	0
c	ふえています	0	0	c	おばあさんです *	98.0	100
d	ふています	0	0	d	おばあさんです	2.0	0
③				⑥			
a	まだ たいています	16.3	3.3	a	どれでもいいです	0	0
b	また だいています *	24.5	50.0	b	どうでもいいです	0	0
c	まだ だいています	51.0	43.3	c	とつてもいいです	0	3.3
d	また たいています	8.2	3.3	d	とつてもいいです *	100	96.7

す」の「また」のアクセントは○●であるが、「まだ」のアクセントは●○である⁴⁾。したがって、「また」と「まだ」のアクセントの区別が習得できていれば、少なくとも「a まだ たいています」や「c まだ だいています」を選択することはなかったであろう。

「聴き取る調査(1)」を全体的に見ると、③の質問を除き、どの質問でもほぼ90%前後の者が正しく聴き取っている。ここには、テープの発音が日本語の日常会話よりややゆっくりとした速さであったこともあろう。また、インフォーマントの習熟度が高かったことも考えられる。

3.2 聴き取る調査(2)

ここでは、あらかじめある単語が示されており、その語に対する4通りの発音の中からよいと思うものを一つだけ選択するという質問である。4通りの発音の中には日本語としてかなり不自然な発音も含まれている。ただし、漢字で示してある語について、特に振り仮名は付していない。調査結果を表3に示す。表の中で、発音記号で書かれているものがテープの中での実際の発音である。

調査結果を見ると、「聴き取る調査(1)」で見られたようなタ行子音とダ行子音の識別の問題がここにも見られる。

まず、「①生徒」を見てみよう。「生徒」の「と」に注目すると、「a [seito]」や「d [seto]」がよいと回答した者は合計すると2年生約70%・3年生約50%である。一方、

4) ○・●はアクセントの相を表わす。○は当該の音節が低く発音されることを、●は当該の音節が高く発音されることを示す。

第3表

(%)

①生徒		2年	3年	④あなた		2年	3年
a	[seito]	40.0	43.3	a	[anat ^h a]	20.0	46.7
b	[seido]	10.0	33.3	b	[anara]	0	3.3
c	[se:do]	18.0	16.7	c	[anata]	56.0	30.0
d	[se:to]	32.0	6.7	d	[anada]	24.0	20.0
②十本				⑤一万人			
a	[dzuppon]	30.0	63.4	a	[itʃiban ^d ʒin]	4.0	6.7
b	[dʒu:hon]	6.0	3.3	b	[itʃimanniN]	64.0	80.0
c	[dʒu:bon]	2.0	0	c	[itʃibanniN]	2.0	0
d	[dʒippon]	62.0	33.3	d	[itʃiban ^d ʒin]	30.0	13.3
③英語				⑥おどろく			
a	[eigo]	58.0	58.6	a	[orodoku]	4.0	0
b	[e:ŋo]	20.0	10.3	b	[otoroku]	48.0	73.3
c	[e:go]	8.0	17.2	c	[odoroku]	40.0	26.7
d	[eiŋo]	14.0	13.8	d	[ororoku]	8.0	0

「b [seido]」や「c [se:do]」がよいと回答した者は合計すると2年生約30%・3年生約50%となり、タ行子音とダ行子音の混同が見られる。

また、「④あなた」では、共通語の発音の「c [anata]」を回答している者は、2年生で60%近く、3年生で30%であるが、「d [anada]」を2・3年生ともに約20%の者が回答している。そして、「あなた」の「た」を強い気音を伴う有気音で発音した「a [anat^ha]」⁵⁾を選んだ人は2年生20%、3年生では50%近くいる。

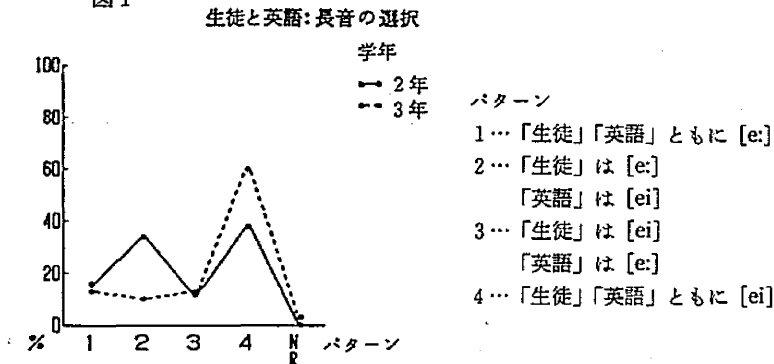
「⑥おどろく」を見ると、「b [otoroku]」を2年生約50%・3年生約70%の者が回答しており、タ行子音とダ行子音の混同が激しい。これらは4.1で詳しく述べる。また、ここでは学年差が見られ、3年生の方がタ行子音とダ行子音の混同が著しい。このような学年差についても4.2で後述する。

では次に、「生徒」や「英語」等に現われる連母音の「えい」を、[ei]と発音するか、[e:]と発音するかの問題を「①生徒」と「③英語」で見てみよう。共通語の発音では、ごく丁寧に発音する場合を除き、「生徒」や「英語」等の漢語に現れる「せい」や「えい」は[sɛ:] [e:]と長音で発音される。ただし、「えい(魚)」や「姪」等の和語の場合はこの限りではなく、[e:]や[me:]のような長音では発音されず、[ei] [mei]という連母音で発

5) [t^h]は有気音の[t]を表わすものとする。以下これに準じる。

6) 「生徒」「英語」等の「せい」「えい」の母音の発音には日本国内でも地域差があり、九州地方・四国地方・紀伊半島南部等では、長音[e:]ではなく、[ei]として発音される(NHK, 1986, 「一解説・付録一」P. 68, 第5図による)。

図1



音される (NHK, 1986, p.132)⁹⁾。そこで、「①生徒」と「③英語」において「せい」「えい」の発音に注目し、長音 [e:] を選択したか、連母音 [ei] を選択したかによって組合せを考えると四つのパターンが得られ、このパターンで集計すると図1のような結果が得られる。

「生徒」「英語」とともに [se:] [e:] と長音で発音しているもの (パターン1) を選択している人は2年生16.0%・3年生13.3%である。一方、どちらも連母音 [sei] [ei] で発音しているものを選択している人は2年生38.0%・3年生60.0%である。また、片方では長音を選択しているが、一方では連母音を選択している人 (パターン2と3) は、合計すると2年生46%・3年生23.3%であるが、「生徒」と「英語」を比較すると、「生徒」の方が長音を選ぶ比率が高い。これを見ると、漢語等に現れた「せい」や「えい」を長音で発音するという認識は確立されていない。学年別に見ると、2年生においてはやや認識があると思われるが、3年生では認識が薄く、学年差が大きい (→4.2)。

参考までに表4を挙げる。信州大学人文学部馬瀬研究室が行なった日本人学生を対象とした調査⁷⁾によると、「「生徒」を「セイト」と言うか、「セート」と言うか」の質問に対し、82.3%が「セート」と言う回答しているにもかかわらず、「標準語の発音だと思うのは「セイト」「セート」のどちらか」という質問になると、87.5%が「セイト」が標準語だと回答している。この調査結果を見ると実際の発音と標準語の意識は完全に逆転している。日本の現代の学生では、実際の発音は「セート」を使うが、標準語では「セイト」であるという意識を持っているのである。これは、おそらく「せい」という表記に引かれ、「セイト」が標準語であるという認識が生じたためであると思われる。

次に、「②十本」について見てみよう。「十本」は、歴史的には [dʒippoN] と発音するのが正しく、辞典では「じっぽん」を採用しているものが多い。

先にあげた馬瀬研究室の調査によれば (表4参照)、「十本」とは異なるが「十階」について調査した結果を見ると、「「十階」を「ジュッカイ」と言うか、「ジッカイ」と言うか」の質問に対し、94.8%が「ジュッカイ」と言う回答している。また、「標準語の発音だと思

7) 1988年実施。インフォーマントは信州大学人文学部国語学概論受講生96人 (男性44人、女性52人)。

第4表

※複数回答可	生徒		十階		(%)
	セイト	セート	ジュッカイ	ジッカイ	
どちらを使うか	24.0	82.3	94.8	5.2	
標準語だと思う	87.5	12.5	77.1	20.8	(無回答は表から除いた)

うのは「ジュッカイ」「ジッカイ」のどちらか」の質問に対しては、77.1%が「ジュッカイ」を標準語だと回答している。これは上記の「生徒」の場合と異なり、実際の発音も標準語の意識も「ジュッカイ」であり、「ジッカイ」が「正しい」という認識はほとんどない。「十階」の「十」は単独では「ジュウ」であるので、学生の意識としては、この表記に引かれ、実際の発音も標準語の意識も「ジュッカイ」になったものと考えられる。

さて、ここで今回の調査結果に戻ろう。

調査結果を見ると、2年生では共通語の発音である「d [dʒippon]」を選択した人は約60%なのに対し、3年生では約30%である。一方「a [dʒuppon]」を選択した人は2年生30%なのに対し、3年生では約60%と、学年の間で、選択肢aとdにおいて数値が逆転し、学年差が激しい(→4.2)。なお、「十本」で[dʒippon]を選択した者の比率は、日本人学生の「十階」における「ジッカイ」選択者の比率よりもはるかに多い。ここには教育の問題もあろうが、「十」が台湾語の文語では[jip] (第4声)、北京語では[si:] (第2声、ただしsは捲舌音)であることも影響していると考えられる。

では次に「③英語」について、長音に関しては既に触れたので、ここではガ行子音に力点をおきながら見てみよう。ガ行子音は一般に語頭では軟口蓋閉鎖音 [g]、語頭以外では軟口蓋鼻音 [ŋ] である。したがって「英語」の「語」は [ŋo] と発音するのが標準語的な発音であって、正しいとされる。

しかし、調査結果を見ると [ŋo] の発音を持つ選択肢bとdを合計すると、2年生34.0%・3年生23.3%とかなり少ない。ガ行鼻音は台湾の学生にとって難しいことがわかる。次に、「英語」の「英」の発音であるが、共通語の発音 [e:] を選択した者(bとc)は2年生28.0%・3年生27.6%とこれもかなり少ない。したがって、鼻音および長音を選択した者は2年生20%・3年生10%と極めて低い比率を示している。

ただし、ガ行鼻音が日本の若年層から消失しようとし、また、「えい」も丁寧な発音では [ei] も行われている現在、「英語」の発音をどのように教えたらよいかは、慎重に考えるべき問題であると思われる。

最後に、「⑤一万人」について見てみたい。

3年生では、80%の者がbの [itʃimannin] を正しく選択しているのに対し、2年生では、dの [itʃiman⁴ʒin] がよいという者が30%いる。インフォーマントの母語である台湾語では「一万人」の「人」は、文語の場合 [ʒin] (声調は第2声) と発音される。したがって母語の影響から、[⁴ʒin] と発音しているaとdを選んでしまったのであろう。また、ごくわずかではあるが、「万」の「ま」を [ba] で発音したaの [itʃiban⁴ʒin] やcの [itʃibannin] を選択している者がある。これは、台湾語の「万」の発音が [ban] (声調は第5声) であ

第5-1表

		(%)		(人)		
主な回答		2年	3年	その他(漢字を のぞく)内訳	2年	3年
①	だいがく *	74.0	96.7	だいなく	2	0
	たいがく	12.0	3.3	だいらぐ	1	0
	その他	14.0	0	がいがく	1	0
				らいがく	1	0
				たいんがく	1	0
②	てんき *	92.0	100	てんぎ	1	0
	その他	8.0	0	でんぎ	1	0
				たへんき	1	0
③	バス *	92.0	93.3	バス	2	1
	その他	8.0	6.7	バスー	1	0
				バスー	1	0
				バース	0	1
				ばっす	1	0
④	からだ *	68.0	93.3	かなた	3	
	からた	22.0	6.7	かなだ	2	
	その他	10.0	0			
⑤	デバード *	56.0	60.0	デをテとしたもの	6	2
	デバート	6.0	10.0	バ→バ	1	2
	テ〜類(テバート, テハード, テバート)	10.0	6.7	バ→ハ	1	1
	デーバート/デバートー類	4.0	0	ト→ド	7	6
	デッバート/デッバード	4.0	3.3	デ→デッ	3	1
	その他	20.0	20.0	長音の脱落	3	1
			長音の位置の違い (重複あり)	2	0	

※⑤デバートについては、誤答の種類が多数であったので、一つの音節に注目したときの間違いを述べ数で表した。

るため、「人」の場合と同じく、母語の影響からこのような選択をしたものと思われる。

3.3 聴き取る調査(3)

ここでは、先の「聴き取る調査(1)〜(2)」とは異なり、テープの中で発音していることばを、実際に平仮名または片仮名で書いてもらった。発音は各々3回ずつ繰り返した。

調査結果を表5-1および表5-2に示す。表の中で*の印が付いているものがテープの中で発音しているものである。「⑤デバート」と「⑦ボタン」は他の語に比べ、誤答の種類が多かったので、表中に記してあるような集計方法をとった。詳しくは表を参照されたい。また、この調査は「平仮名または片仮名」で回答してもらうという趣旨であったので、通常片仮名で表記する外来語の「③バス」「⑤デバート」「⑦ボタン」等の場合でも、「平仮名または片仮名」のどちらかで回答してあれば有効回答とし、その他の質問についても同様に扱った。ただし、わずかのインフォーマンは「①大学」「⑥病院」等を漢字で回答していた。これは「その他」に含めた。

まず、表5-1「①大学」から述べる。3年生は90%以上が正しく聴き取っているのに対

第5-2表

		(%)		(人)		
主 な 回 答		2年	3年	その他(漢字をのぞく)内訳	2年	3年
⑥	びょういん *	88.0	90.0	びょうひん	1	0
	びょういん	2.0	10.0	びょいん	1	0
	その他	10.0	0	びょっいん ばんいん べういん	1	0
⑦	ポタン *	8.0	26.7	タをダとしたもの 撥音の挿入	38	18
	ポダン	42.0	33.3		6	6
	ぼ〜類(上記2語を除く)	18.0	10.0	※「⑦ポタン」については、誤答の種類が多数であったので「ポダン」以外は最初の音節に注目して集計した。また、本欄では「その他」の内訳ではなく、全誤答の中から間違いを述べ数で表した		
	も〜類	20.0	6.7			
	ぼ〜類	4.0	20.0			
	その他	8.0	3.3			
⑧	みかん *	88.0	90.0	みっかん	2	1
	その他	12.0	10.0	みがん	1	2
				にかん にいがん にっかん	1 1 1	0 0 0
⑨	すずしい *	76.2	96.7			
	すずし	24.0	3.3			
⑩	りんご *	92.0	96.7	にんご	3	1
	その他	8.0	3.3	ぎんご	1	0

し、2年生は「だいがく」の「た」を「だ」と聴き取っている者が約10%いる。ここにはタ行子音とダ行子音の問題があるが、両子音の語中での混同と比較するとそれは目立って少ない(→4.1)。

次に、表5-1「②天気」を見てみると、これは2・3年生ともに90%以上が正しく聴き取っている。したがって、この語に関してはタ行子音とダ行子音の混同がほとんど見られず、問題がないと思われる。

表5-1「③バス」でも、2・3年生ともに90%以上が正しく聴き取っているのので、この語についてはバ行子音とパ行子音の混同の問題はないであろう。

表5-1「④からだ」では、「からだ」と聴き取っている者が2年生に約20%いる。ここにはタ行子音とダ行子音の問題がある(→4.1)。

次に表5-1「⑤デパート」を見てみよう。この語は正答率が比較的 low、様々な回答が現われた。長音の脱落や長音の場所を間違えたものなどもあるが、誤りの多くは、「デパート」の「デ」「ト」をそれぞれ「テ」「ド」としたものであり、特に後者に多い。ここにもタ行子音とダ行子音の識別の問題がある(→4.1)。「デパート」のような日本語の外来語は、元の外来語の発音とかけ離れたものが多いので、日本語学習者にとっては特に習得が難しい

と言える。

次に表5-2で「⑥病院」を見てみると、2・3年生ともに80%~90%が正しく聴き取っているのので、この語の拗音や撥音、バ行子音については問題がないと思われる。

表5-2「⑦ボタン」を見ると、この語は「聴き取る調査(3)」の中で最も正答率が低く、3年生では約30%が正しく聴き取っているに過ぎず、2年生では10%以下と極めて低い。また、この語は同じ外来語の「デパート」と比較しても平仮名で回答したものが非常に多いことから、「ボタン」という単語の習得度が低かったためであるとも考えられる。

では、どんな誤りが多いかを見ると、最も多いのは「ボタン」の「タ」を「ダ」としたもので、2年生では50人中38人(76.0%)、3年生では30人中18人(60.0%)がそのように回答しており、タ行子音とダ行子音の混同が激しい(→4.1)。

また、その他では、「ボ」を「も」としたもののや、「ボ」を「ぼ」としたものが、前者は2年生で20%、後者も3年生で20%いる。インフォーマントが「も」と聴き取ったのは、「ボ」の子音が両唇閉鎖音であるため、調音点を等しくする両唇鼻音との混同が起きたためであると考えられ、「ぼ」と聴き取ったのは、同じ両唇閉鎖音の有声音と無声音の混同が起きたためであろう。

次に表5-2「⑧みかん」を見てみよう。この語も2・3年生ともに90%前後の者が正しく聴き取っているのほとんど問題がないと思われる。

表5-2「⑨すずしい」では3年生は90%以上が正しく聴き取っている。2年生でも、ほぼ正しく聴き取っているが、「すずし」と回答した者が20%以上いる。これは、「すずしい」の「い」の長音を、拍を持たない台湾語を母語とするインフォーマントは聴き取ることができなかったためであろう。しかし、ザ行子音についてはよく聴き取っている。

最後に表5-2「⑩りんご」を見てみよう。この語も、2・3年生ともに90%以上の者が正しく聴き取っているのので問題がないと思われる。

以上、「聴き取る調査(3)」として見てきた。ここにはバ行子音・マ行子音・ザ行子音の問題や、撥音・拗音・長音等の問題も織り込んだが、かなりよく聴き取ることができていて、これらについては多少の軽重はあるが、あまり問題はないと思われる。しかし、「⑤デパート」や「⑦ボタン」で見たようなタ行子音とダ行子音の識別に問題が見られる(→4.1)。なお、モーラ音素に関するものとして、上記の他に促音に関する問題も織り込むべきであったと思う。

4 調査結果に見られる日本語教育上の問題点

4.1 タ行子音とダ行子音の混同

「聴き取る調査(1)~(3)」で見られた、タ行子音とダ行子音の混同の問題についてここで考えてみたい。なお、台湾語の音韻体系については、鄭良偉他(1977)などによった。

日本語には、閉鎖音の系列では無声子音音素と有声子音音素の音韻的対立があり、/p/と/b/、/t/と/d/、/k/と/g/は音韻的に区別される。これらの無声子音は、今/t/の場合を例にとれば、「たんす(筆筒)」や「たから(宝)」等のような語頭に現われた場合は、中国語の有気音ほどではないが少し気音を伴った [tʰ] として実現される。一

第6表

日本語の場合		
<無声音>	<有声音>	
/p/	—————	/b/
/t/	—————	/d/
/k/	—————	/g/
語 頭 語頭以外		
<有声音> /b/	[b-]	[-b-]
/d/	[d-]	[-d-]
/g/	[g-]	[-g-]
語 頭 語頭以外		
<無声音> /p/	[p ^h -]	[-p-]
/t/	[t ^h -]	[-t-]
/k/	[k ^h -]	[-k-]

第7表

台湾語の場合		
	語 頭	語頭以外
<有気音>	/p ^h / [p ^h -]	[-p ^h -]
	/t ^h / [t ^h -]	[-t ^h -]
	/k ^h / [k ^h -]	[-k ^h -]
<無気音>	/p/ [p-]	[-p-]
	/t/ [t-]	[-t-]
	/k/ [k-]	[-k-]
<有声音>	/b/ [b-]	[-b-]
	— — —	— — —
	/g/ [g-]	[-g-]

第8表

日本語		
<無声音>	/t/ [t ^h -]	[-t-]
<有声音>	/d/ [d-]	[-d-]
台湾語		
<有気音>	/t ^h / [t ^h -]	[-t ^h -]
<無声音>	/t/ [t ^h -]	[-t ^h -]

を音素体系の中に持ち込むことが難しいことから、台湾語の有気音 [t^h] で日本語のタ行音をとらえ、無気音 [t] で日本語のダ行音をとらえたのである。このとらえ方は語頭ではタ行子音とダ行子音の識別に有効ではあるが、語頭以外では両者とも有気音を持たなくなるので、この識別には役立たなくなり、混同が起こってくるのである。

では、調査結果の具体例にあたってみよう。

方、「また、だいています」の「また」や「あなた」「せいと（生徒）」のように語頭以外に現われた場合には、気音がほとんどなくなり、それはちょうど中国語の無気音に近く実現される。これらの点は、/p/や/k/でも同様である。以上をまとめたのが表6である。

次に、インフォーマントの母語である台湾語（閩南語）はどうか。

台湾語にも、北京語と同じような有気音と無気音の音韻的対立がある。閉鎖音の系列には、強い気音を伴う有気音の [p^h] [t^h] [k^h] と、気音を伴わない無気音の [p] [t] [k] との音韻的対立がある。また、無気音には通常軽い声門閉鎖 [ʔ] (glottal stop) を伴う。

また、台湾語には日本語にあるような無声音と有声音の音韻的対立も見られ、それは両唇閉鎖音と軟口蓋閉鎖音に認められる。両唇閉鎖音に関して、有気音 [p^h] と無気音 [p] の他に、有声音 [b] がある。軟口蓋閉鎖音に関して、有気音 [k^h] と無気音 [k] の他に、有声音 [g] がある。しかし、歯茎閉鎖音に関してはこの対立はない。つまり、有気音 [t^h] と無気音 [t] の対立はあるが、有声音 [d] はない。以上、台湾語についてまとめると表7のようになる。したがってこのような両国語の音韻的構造がタ行子音とダ行子音の混同をもたらしたと見ることができる。

次に、タ行子音とダ行子音の混同が語頭以外で多く起こっているのはなぜか考えてみたい。これは以下のように考えられるのではないか。

前述した閉鎖音系列の中から歯茎閉鎖音については、日本語・台湾語の部分を取り出すと表8のようになる。この構造的な特徴から、台湾語を母語とするインフォーマントは新たに /d/

「聴き取る調査(1)」の「①また…」を「まだ」と聴き取ったのは、テープでは「また」の「た」を無気音に近く発音したため、これを「だ」ととらえたものである。

「聴き取る調査(2)」の「①生徒」の「徒」の発音として[do]をよいとしたものは、無気音またはそれに近い発音の [to] [do] の中から選択を迫られるところから、有声音・無声音の識別を持たない台湾語を母語とするインフォーマントは混同を余儀なくされたのである。

「聴き取る調査(2)」の「④あなた」の「た」について述べる。日本語としては極めて不自然な発音である [tʰa] を「よい」とした者がかなりいたのは、台湾語を母語とするインフォーマントが、タ行子音を有気音 [tʰ] で把握する傾向があったことから説明がつく。一方、「た」を [da] で発音したものをよいとしたことについては、[tʰa] は不自然だということがわかった学生も、[ta] [da] の両者とも無気音に近く発音されるので、どちらが日本語の発音として正しいかは識別できず、混同を引き起こしたのである。

「聴き取る調査(2)」の「⑥おどろく」の「ど」を [to] で発音したものを「よい」をしたものは、[otoroku] に気音がないために、これを [do] と認定したものである。

「聴き取る調査(3)」の「④からだ」を「からた」を聴き取ったのは、質問用テープの発音が少しゆっくりであり、かつ明瞭に発音しようとしたために、「からだ」の「だ」には多少の気音を伴っていた。したがって、有声音 [d] を識別できず、この気音を有意味なものとしてとらえたインフォーマントは、「からだ」の「だ」の発音を「た」を認定したのであろう。

「聴き取る調査(3)」の「⑦ボタン」を「ボダン」と聴き取ったのは、「聴き取る調査(1)」の「①また…」の場合に準ずる。

なお、共通語である北京語では、無気音・有気音の音韻的対立はあるが、閉鎖音の系列には、無声・有聲の対立がない。したがって、中国大陸のこの種の区別を持たない日本語学習者の無声音・有声音の聴き取りの問題、およびその音声の習得の問題はさらに深刻であると想像される。

4.2 学年差の問題

今回の調査では学年間の比較を行なうため、2・3年生の2学年にわたって調査を行なった。調査を実施する前には、2年生よりも3年生の方が正答率が高いのではないかと予想があった。しかし音韻に関しては、2・3年生の間には大きな差はあまり見られなかった。しかも、4.1でも述べたように、タ行子音とダ行子音の混同は2・3年生で比較してもそれほど差がなく、3年生の方が混同が著しい場合もあり、この識別は特に難しいようである。また、その他にも、「3.2.聴き取る調査(2)」の「①生徒」や「③英語」の長音や、「②十本」の発音などは、3年生よりも2年生の方が正答率が高く、「②十本」では、比率の数値が全く逆転していた。

これらの学年差にはどのような問題があるか考えてみたい。まず、考えられるのは教育を行なう教師の問題である。特に先の「十本」では歴史的に正しいとされる [dʒippoN] を選択したものは2年生に圧倒的に多く、日本人学生に見られた [dʒuppon] は3年生に多かった。したがって、2年生と3年生で、教師が違い、「十本」の発音が異なっていたのではないかと考えられる。また、もう一つ考えられるのは、表3におけるインフォーマントが受けてきた日本語関係のカリキュラムの問題である。表1を見てみると、2・3年生で、単位数がやや異なっているものの、第1学年ではどちらでも「日語会話」という日本語の会話の授

業がある。しかし、3年生の場合、第2学年になると、日本語の会話の授業はなく、しかも、第1学年にくらべると全体的に日本語関係の単位数が減っている。輔仁大学出身の留学生によれば、第2学年では他の外国語や一般教養の授業が増えるということである。

したがって、3年生は、第1学年では会話の授業を受けたが、第2学年では会話の授業がなく、また、全体的に日本語の授業が減ったため、第1学年で学習したことを忘れてしまったものと考えられる。そして、質問によっては、まだ記憶に新しい2年生の方が正答率が高かったのであろう。

5 おわりに

以上、台湾語を母語とする日本語学習者（大学生）の日本語の音韻について、「聴き取る調査」を中心にその実態と特徴を述べ、問題点を考察した。調査時間等の制約も多く、調査項目も限られたものしか取り上げられなかったという反省が残る。「聴き取る調査」の他に「読ませる調査」も行っており、その中には本稿で扱った音韻項目と共通する項目も若干あるので、今後はその分析を行っていきたい。

〔後記〕

本稿の資料収集にあたっては、輔仁大学外国語文學院日本語文学系主任林水福教授および前系主任山崎陽子教授をはじめとする関係各位、さらに同学院日本語文学系の学生の皆さまにご協力いただいた。記してお礼申し上げる。

本稿は平成元年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文の一部を補訂したものである。また、本稿と同じ内容のものを日本語教育学会平成元年度第8回研究例会（1990年2月17日、国立教育会館）において口頭発表した。その際には、稲垣滋子先生をはじめ多くの方々から有益な助言をいただいた。これらについては本稿執筆の際十分参考にさせていただいた。さらに、本研究は野沢素子（1974）ほかの先行研究に負うところが大きい。

最後に本稿作成にあたり、懇切なご指導をいただいた馬瀬良雄先生に心からお礼申し上げます。

なお、本稿は平成元年度「みすず松高科学研究助成金」による研究成果の一部であることを付記する。

参考文献

- NHK編（1986）『改訂新版 日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会
 国語学会編（1980）『国語学大事典』（初版）東京堂
 日本語教育学会編（1989）『日本語教育事典』（縮刷版第3刷）大修館書店
 鄭 良偉 他（1977）『從國語看台語的撥音』台湾学生書局
 野沢素子（1974）「台湾人留學生の日本語學習に於ける音声の諸問題についての報告」『日本語と日本語教育』第3号
 野沢素子（1981）「官話音系・粵音系・閩音系の各話者の日本語學習における音声の問題点について」『日本語と日本語教育』第9号